
龍・激・王！

エンペラーディケイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍・激・王！

【Zコード】

Z2342E

【作者名】

エンペラーディケイド

【あらすじ】

物語の最初は主人公勇騎の奴隸時代から始まる。なぜ主人公は奴隸になってしまったのか？勇騎はこの世界になくてはならない存在だというそしてこれから勇騎はどのような人生を送ることになるのか！恋愛あり！戦闘あり！本格的戦闘RPG今ここに参上！

プロローグ…勇騎！参上！

大海原の真ん中に立つ一つの島、その島には大きな山がたつていた。その山のなか宮殿のような建物の中、人々は魔物に奴隸として働らかされていた。

「ちゃんと働け！」ムチを持った魔物が一人の老人を叩いた。「勘弁してくださいされこれ以上は無理です」魔物は

「うるせえ！奴隸のくせに生意気なんだよ。」ムチでまた老人を叩こうとした。その時、「待てよ、老人をひっぱたくもんじゃねえぜ」一人の若者が言つた。魔物は

「なんだてめえは、俺に逆らうのか？」

「やめておけ逆らえば殺されるぞ」回りの人々は言つた。

「うるせえ！てめえに好き勝手やらせるかよ」若者は言つた。

「てめえ、ひっぱたいてやる」魔物はムチを振り回し攻撃してきた。しかし、若者はムチを素手でつかみ魔物を投げ飛ばした。若者は同時に魔物に殴りかかつた。

「このやろう！」

魔物を殴り飛ばした。魔物は遠くへとばされ壁に思い切つりぶつかつた。

「何者だきさま？」若者は

「俺か？俺は宇宙一強くなる男

勇騎だ！」

この勇騎こそからの世界に必要な救世主になる男だった。

「大丈夫か？」

勇騎は言つた。

「ありがとうございますでもあなたの立場が…」老人は言つた

「大丈夫だよ。あんな奴らが何体来ようと敵じやねえ！」

神殿の奥に向かつていつた魔物がいた
「ジユラ様！」「どうした？なにがあつたか？」そのジユラとよばれた魔物が答えた。身長は一メートル以上あり黒いオーブをまとつ

ていた。

「さつき奴隸の人間にコテンパンにやられましたあの強さは異常です。このままではこここの兵隊が全滅する恐れがあります」

ジユラは言った。

「その者は名はなんといつ?」

魔物は言った

「勇騎と言つていました。」

「勇騎?」ジユラは少し考へこだから言つた。

「今度妙なまねしたら容赦するな」

「ははつ

「ここは奴隸たちが寝泊まりする個室オリの中にベット2つがあるだけだった。その個室に一人ずつの部屋がある。個室はなん部屋かあり、勇騎と老人は一緒の部屋だった。

老人は言つた。

「なぜあんなに強いのに捕まつて奴隸にされてしまったんじや?」

勇騎は言つた。

「それはいろいろあつてな……」

老人は

「そうか話したくなれば話さなくてよいぞ」勇騎は

「いや、長い話になるが聞いてくれないか?俺のこれからのためにも」

勇騎は話しだすのだった……

プロローグ… 勇騎！参上！（後書き）

次回、勇騎の過去が明らかに…！つい期待！

第1話　俺の過去（前書き）

ついに勇騎の過去が明らかに…

第1話 僕の過去

勇騎は語り始めた。「今から約8年前、俺は三才のころから父の龍騎と親子で旅をしていた」

「勇騎、大丈夫か？ もうすぐだぞ」父の龍騎が言った。

「大丈夫だよ。父ちゃん。」見渡す限りの大地、

俺達は父の友達のイグリ城の王様イグリから頼み事があると、城に呼ばれたのだった。

「父ちゃんはすごいな。王様が友達なんだもん…」父ちゃんはいろんな人から尊敬されていた。王様や大臣などにも知り合いがたくさんいる。それに力もすごく強いよく俺に、

「俺は百匹のモンスターをひとつふりで倒せるんだぜ」

とよく自慢してきた。

どの位歩いたかやつとイグリ城の前についた回りは川に囲まれ、橋がかかっていた。その橋を渡ると、大きな門があつた。龍騎は門の前に立つている兵士に言った。

「イグリ王の友、龍騎です。王のお呼びにより参上つかまつりました。」兵士は

「龍騎様ですか？ お待ちしておりました。」兵士は門を開けた。

「ささつ中へどうぞ」中へ入ると大きな大広間があつた。俺たちは赤いじゅうたんの上をまっすぐに歩き、上に行く階段を上がり、二階へ上がつた。二階には図書館らしきものがあり、左には食堂のようないわの部屋があつた。隣にあつた。階段を上がり、三階に上がつた。階段を上がつた後は 前に扉があつた。

「さあ、中へお入りください。王がお待ちです。」兵士は言つて扉を開けた。そこには王室があり、立派な椅子に王様が座つていた。小さい頃の俺は始めて王室に入ったので緊張していた。

王様は立ち上がり、

「おお、龍騎！ 久しぶりだな、まあ立ち話もなんだ。そこへ座れ」

すぐ近くに椅子と机があった。3人はそこへ行き座った。

龍騎は

「イグリ久しぶりだな、何年ぶりだらうか」

イグリ王は

「おお、そこにはいるのはそなたの息子か?」

勇騎は

「勇騎です。よろしくお願ひします。」と言った。

イグリ王は言った。

「こういう城は初めてだらう私達が話してゐる間城を探検していたらどうだ?」

勇騎は

「いいんですか? ありがとうございます。」勇騎は階段を走つて降りていった。

勇騎は一階へ降りた。一階には図書館が右に 左には食堂と別れていた。勇騎はまず図書館に入った。

本棚がたくさん回りにあり天井に届くくらいの高さだ。あまりの本の多さに勇騎は驚いた。

「おお~小さい子が図書館に来るのは珍しい。歴史に興味があるのかな?」真ん中の椅子に座つていた老人が話しかけてきた。

勇騎は

「すつごいなっこ。なんの本があるんですか?」「右にはここの城の歴史の本、左には世界の...」老人の説明は10分位続いた。

「ありがとうございました」

勇騎は出てきた。

「はあ。疲れた。説明なげーな」

次は一階に降りた。

一階にはいろんな部屋があつた。大臣の部屋、兵士長の部屋、などいろんな部屋があつた。

勇騎は歩いてると、一人の同じ年位の子どもが勇騎に向かつて

「お前見たことぬない奴だな、よし。お前を手下にしてやるわ」

勇騎は

「はあ～なんでオマーの手下になんなきやならねえんだ」

その子は

「なんだその言葉は王子に向かつてなんだ？無礼だぞ」

勇騎は

「るせ～てめえ」そなんなんだよ。」

「人がにらみ合つてる時に。龍騎がきた。」

「おお、勇騎ここにいたか おや？その子は友達か？」

勇騎は

「こいつなんかいきなり手下にしてやるとか言つてきたんだよ。わけわかんないよ」

龍騎は

「その子は王子様だよ勇騎、ジーク王子だよ」

勇騎は

「王子？」「いつが？」

ジークは

「そうだ。ははは今から俺が隠れるから見つけてみる。見つけたらお前を家臣にしてやる。だめだったら手下な」 そういうてどこかへ走つていつた。

「どつちもかわんねえだろ～！」

勇騎はいつた。

龍騎は

「勇騎聞いてくれイグリに頼まれたんだがあの王子の友達になつてくれないか？あの子ああいう性格だから友達ができないんだって。本当はみんなと遊びたいのに…」

勇騎は

「へつ～おもしれえ。取つ捕まえてやる～」 龍騎は走つていつた。

龍騎は

「俺の話聞いてた…？」 勇騎は走つていぐと一つの部屋を見つけた。そこ扉には

「王子の部屋」と書かれていた。

「ここだ。」勇騎は扉を開けた。しかし、ベットと机があるだけで人影は見当たらなかつた。勇騎は机の下にスイッチがあるのを見つけた。押してみたすると階段がでてきた。

「よしひ」中へ入つた。下に続いていた。階段を降り、地下道のようなところにでた。まつすぐ行くと光が見えた。進むと外にでた。ここは城の川の前だつた。

「よく見つけたな」声がして振り替えるとジークが立つていた。
「じゃ約束通り家臣に……」

「待て」勇騎は言った。

「友達じゃだめか？」

ジークは

「友達？」ときいた。

「ああ、友達だ。」

「なぜお前と友達にならなければならん。

「俺は王子だぞ。身分が違うんだ」

ジークは言った。

「うるせえ！身分なんてどうでもいいんだよ。お前友達が欲しいんだろなら俺がなつてやるよ。お前と俺は友達だ！」

ジークは

「友達？」と言つた。

「寂しかつた今までそんなことを言われたのは初めてだ。すまん。ずいぶんひどいことを言つてしまつた。」

勇騎は

「わかりやいいんだよ……」

「いまだ！」

突然後ろから大人が一人襲いかかってきた。

「なんだてめえらは？」勇騎は殴りかかるうとした。

「動くな！ガキ！王子がどうなつてもいいのか？」

大人二人は急いでいかだにのり、逃げていった。

「待ちやがれ！」勇騎は追いかけようとした。が、いかだは遠くへ行ってしまった。そうだ父ちゃんに知らせなきや。

勇騎は王の間へ行きイグリと龍騎に知らせた。

「なにい！わかつたすぐに探させよう。」イグリは家臣にジークを探すよう言った。

龍騎は

「よく知らせてくれたな。あとは俺に任せろ！」

勇騎は

「俺も行く！ジークを助けるんだ。」

龍騎は

「お前を危険な目に会わせるわけにはいかん。待つてくれ必ずもどつてくる。」そう言って龍騎は探しに言った。ここでじつと/or>る訳にはいかない。俺も行くぜ。

勇騎は城を出た。しばらく歩くといかだが置いてきぼりにたつていた。

「これだ！」勇騎は近くにあつた足跡をたどつて行った。その先には不気味な遺跡があつた。やつらはここにジークをつれさつたのか。ここでじつとしてる訳にはいかない。俺も行くぜ。

勇騎は城を出た。しばらく歩くといかだが置いてきぼりにたつていた。

「これだ！」勇騎は近くにあつた足跡をたどつて行った。その先には不気味な遺跡があつた。やつらはここにジークをつれさつたのか。行くぜ！勇騎は中へ入つた。中薄暗く氣味が悪い。ちょっと進むと部屋があつた。その部屋から声がした

「ガキ一人捕まえるのなんて楽勝だぜ」

「兄貴これで儲かりましかたねあの方のお方のおかげで稼いでこれましたね」

さつきの一人組だ！勇騎は気づかれないように牢屋に向かつた。もう少し…

ガチャン！音をたててしまつた下にある酒をけつてしまつた。

「誰だ！？」二人組が襲いかかってきた

「ん？さつきのガキじゃねえか。こいつも奴隸にしてやる」

「へつ！やれるものならやつてみな！」勇騎は一人を飛び越え

「炎の拳！」と言つて手に炎が包まれ一人を殴つた。

「あちちつ助けてくれー」二人が叫ぶと周りから魔物が現れた。がいこつの騎手がたくさん現れた。「へつ！かかつてこいや！炎の拳！」何匹倒したかだが何匹もいるのできりがない。

「やべえ」壁に追い込まれた。

その時！目にも止まぬ速さで走り抜き 勇騎の前で止まつた者がいた。その者が刀を鞘に納めるとがいこつ達が一瞬で倒れた。

「大丈夫か？勇騎」龍騎だつた。「父ちゃん！」勇騎はよろこんだ。

「速く王子を助けてでるぞ！」牢屋へ行きジークの前にきた「勇騎！」ジークは叫んだ。龍騎が鍵を開けた。

「さあ速くいかだに…」龍騎は言つた。その時、がいこつがこつちにやつて來た。龍騎は

「速く行け！ここは俺が食い止める！大丈夫さ俺は不死身だ！」そう行つて。魔物達に斬りかかつて行つた。

「父ちゃんなら大丈夫だ行こうぜ」

「二人は急いだ。いかだを降り、出口にでようとしたその時！」「はつはつは〜逃げられると思ったか？この鬼ごっこ私の勝ちだね。」声と同時に前に急いでかい魔物が現れた。そいつは黒いロープを着ていた

「私の名はジユラさあ。行こう。私の世界へ…」

勇騎は

「炎の拳！」殴りかかつた。しかしジユラにはびくともしない。

「なにつ！」ジユラは

「面白い技を持っているねならばこれならどうだ！」ジユラの目が光つた。急に勇騎の体が動かなくなつた。ヤバい…

「待てっ！」龍騎がやつてきた

「ジユラ！貴様を倒す！」龍騎は斬りかかつた。ジユラは大きい火の玉を投げた、しかし 龍騎は一振りで火の玉を斬り裂いた
「なかなかやるな これならどうかな」勇騎を人質にとつた。 「父ちゃん俺なんかよりこいつを」

龍騎は笑つた。剣をすて座つた。ジユラは火の玉を連発した 龍騎がダメージをくらいついに倒れた。 「父ちゃん！」

龍騎は 「いいか勇騎よく聞け…母さんは生きている 母さんは魔物に捕まっている母さんを助け出し、魔物を倒し。この世界を救つてくれ…」 勇騎は涙いっぱいになつた。ジユラが火の玉をでかくした。

「遺言は終わりましたか？ ではさうば。」

ジユラは龍騎になげつけた

「父ちゃん～！」

そして俺は氣を失い ジークと共に奴隸なされた…

第1話 僕の過去（後書き）

次回ついに奴隸時代 完結？

第2話脱臼やしつ出念へ…（前書き）

最近いぞがしくて更新が遅れてしません。それと第1話なんですがミスがあつたようすみません。まだ未熟者ですがよろしくお願ひいたします

第2話脱出をして出金へ…

勇騎は全てを語り終わった。

「そんな事があつたのか、つらかつたの～」
じいさんは言つた。 「お主はここにいはいかん。ここから脱出
するんだ」

「でもどうやつて…」

勇騎は言つた。するとアビラが開き、

「おい。時間だ働け」

魔物が来て言つた。

「ちつわかつたよ」

勇騎は言つた その時魔物の後ろから一人、魔物に殴りかかつてき
た。

「何！」

魔物は振り向くと同時に殴られ氣絶した。

「久しぶりだな勇騎 ！」

その若者が言つた。若者は奴隸の破れかけていた服を着ていた。

「ジーク！」勇騎は言つた。そう この若者こそあの勇騎と一緒に
捕まつた王子ジークであった。

「俺が今まで何をしていたと思う？」

ジークは言つた。

勇騎は

「何をしてたんだよ全然働いてなかつたじゃねえか」 「ふつふつ
ふ働いてたさここから脱出する抜け道をな」

ジークは言つた。

「まじかよ。すげえな」勇騎は言つた。 「さすがだなやっぱ俺の
友達だぜ！」

ジークは

「まあ待て夜の見張りは薄い。だから今夜抜けだそう

勇騎は

「よつしゃ。やつと抜けられるぜ」

じいさんは

「よかつたのお頼むぞ一人ともこの世界を救つてくれ

勇騎は

「じいさんは行かないのか?」

「わしは足手まといになるだけじゃわしのせいで逃げられなくなつたらどうする?世界を救う方が大切だろ?」

「でも…」

勇騎は言つた。

「わかつた置いていい」

ジークは言つた。

「なんでだよ!じいさんも連れて行こうぜ」

勇騎は叫んだ。

「お前はじいさんの気持ちがわからんねえのかよ俺らは確実に逃げて世界を救うんだ。」

勇騎は

「わかつた。ぜつてえじいさんも世界も救つてやる待つてろよ!ジラをぶつとばして来てやるからな!」

「頼んだぞ…」じいさんは言つた

その夜、勇騎はジークの部屋に忍びこんだ。ジークはベッドをどかした。するとその下に洞窟が続いていた。

「行くぞ!」二人は中へ入つて行つた。中はうす暗くじばらく歩くと上から海の波の音が聞こえた。

「どうか、ここは海の下か…」

勇騎は言つた。

「いたぞ!追え!」後ろから声がした。なんと魔物が5、6人追いかけてくる。ムチ男や犬のような魔物ケルベロスがいる。

「しました、入り口ふさぐの忘れてた」ジークは叫んだ。

「へつ!問題ねえ!ぶつとばしてやる!…」

勇騎は突つ込んでいった

「炎の拳！」

勇騎の手が炎につつまれ魔物に殴りかかった。

「ふん！」

急に魔術士らしきローブをまとつた魔物がでてきた。

「フリーズ」いきなり呪文を唱え手から冷気がでてきた。

「うわっ」勇騎の足が凍つてしまつた。 「足が動かねえ」

「ミスド！」ジークが呪文を唱えた。

勇騎の足の氷が消えた。

「この呪文はあらゆる呪文の効果を消すんだ。 すげえだろ」 ジー

クは言つた。

「サンキュージークやるじゃねえか」

勇騎は再びかけぬけた。

「いくぜ！俺の新技！」

勇騎の両手に炎がたまつていつた。

「ボルカニックバースト！」

手にためた炎が一気に太い光線になり魔物達に向かつていつた

「ぐわ～」

魔物達は全滅した。

「さあ行こうぜ」

ジークが言つた。

「くつ」勇騎が膝をついた。

「どうした？」ジークがかけよつた

「大丈夫だなんでもない」

勇騎は立ち上がつた。

「そつか」

その時…

「ぐつはつはつは～貴様ら生きて帰れると思ったか…」

前方から大声がした。

前に大きな魔物がいた

右手に剣を持ち、左手に盾を持っていた。目は黒で口からキバがでてがつちりとした体格で色は紫の魔物だつた。

「わが名はバーゴ、ジユラ様に仕える将軍の一人だ貴様らを叩き潰しにきた」

「こいつ先回りしやがつたな氣をつける勇騎こいつかなり強い……」
とジークが言い切る前に勇騎はバーゴに殴りかかつていつた「おい。俺の話を聞け」

ジークは言った。

「へつ！たおしゃいいんだろ！炎の拳！」勇騎は手に炎をまといバーゴを殴つた「ふんそんのきかんな」
バーゴは全く動かず直撃しても全く効かない様子だ。

「何！」

勇騎は言った。

バーゴのでかい大剣が勇騎に襲いかかつた。

「ぐおお」

勇騎は受け止めたが、あまりの力に勇騎はそのままおしかえされてしまつた。

「勇騎」

ジークは叫んだ。

「ウインド！」ジークは叫んだ。風が巻き起つてバーゴに向かつていつた。

「ふんそんそよ風きかんな」

勇騎は立ち上がつた。

「へつ！強ええじやねえかやつとましな奴がでてきたな」
しかし勇騎はジャンプして避けた。
勇騎は構えた。

「来いよ」

バーゴは剣を振り上げ勇騎に振りかざした

しかし勇騎はジャンプして避けた。
「くそつ！身軽なやつめ」

バーゴはそう言つたあと上に剣を振り上げた。

また勇騎はよけた

「くそ！」当たりやがれ」バーゴが言った。

勇騎は

「団体がでかいだけで素早さがねえみたいだな」

勇騎は炎の拳を使った。バーゴにあたった

「ふん、貴様は攻撃力が無いようだな」

バーゴは剣を振りかざした。しかしながらされた

「くそつ体力使うけどこれで…」勇騎は構えた。

「バイタツク！」

ジークは呪文を唱えた。勇騎の体が光に包まれた。

「何だ？ これ」

勇騎は言つた。ジークは言つた。

「一定時間だが攻撃力を倍以上にすることができるいけ」

勇騎の両手が炎に包まれた

「必殺！ 炎のガトリング！」

勇騎は炎に包まれた両手で殴りまくつた。

「ぐは…」

バーゴはもろにくらい倒れた。

「よつしゃ～ざまあ見ろ！」

一人のコンビは勝つた。

「よつしゃ行こうぜ」

二人は走り出した

その時上から岩が崩れ落ちてきた

「くそつさつきの勇騎のガトリングで…」

「おい！俺のせいかよ～逃げる～」

二人は走つた。だが海の水が入つてきた 「ぐはっ」

二人は海に吸い込まれ意識がなくなつていた…

「俺、溺れたのかな…」

勇騎は思つた。だが勇騎を呼ぶ声がした。

「勇騎！」ジークの声だ

はつと目が覚めた

ベッドの上らしい。 なんだここは？

普通の民家のようだ。 地面や天井は木でできていて、隣にベッドがもう一つあった。

ジークは

「大丈夫か？」

勇騎は

「大丈夫だ。 ここはどこなんだ？」

ジークは言った。

「俺たちが溺れて氣を失っているのを見てこの人が助けてくれたんだ」

隣に1人の女の子がいた…

「初めましてレイです。」

レイという女の子が言った。

勇騎は

「助けてくれたのかありがとう…」「
と言つて立ち上がつた。

「だめよ。 まだ安静にしてないと」

レイが笑顔で言った。 その笑顔を見て、勇騎はおとなしくなつた。

そう この子こそ勇騎の人生を変える人物なのだ…

その夜

ジークと勇騎がベッドで寝ていた。

勇騎は

「かわいいよなあの娘…」

ジークは

「何、惚れちまつたか？」

言つた。

「ババカヤロ・そんなんじゃねえよ…」

勇騎は慌て否定した。 するとしたの階から声がした。

「どうする？神様の儀式まであと2日だぞ。誰を生け贋に渡す？」男の声だ。

「もうこの村に若い娘はレイしかいないだろ？」「

「待ってくれ。うちの娘を生け贋に出せと言つのか。」「

どうやらレイの父らしい

「一人だないと村に災いが起ころるんだぞ」「

「わかつたわ。私が行けば村の人救われるのね？私が生け贋になるわ」

レイが言つた。

「おい！なにをバカなことを言つているんだ」「

レイの父がま言つた。

「ごめんなさいお父さん、犠牲が私一人でいいならなるわ」「

「ちょっと待つた」「

勇騎が降りていった。

「なんで生け贋が必要なんだよ？」

1人の男が言つた。 「この村には神様がいてな南の方にある洞窟に住んでおられる。しかし、今から約5年前毎年一回若者の生け贋を出さなければ。この村に災いが起るとおおせになつたのだ。」

勇騎は

「そんなの神でもなんでもねえ生け贋を求めてくるなんてなあ神のやることじやねえ。俺がぶつとばしてやる！」

「待て！神様はつよいんだそんなことをしたらどんなひどいめに合うか…」

勇騎は

「へつ！大丈夫だよ俺は不死身だ！神だかなんだか知らねえが。この娘にてえだすやつは誰だろ？と潰す！」「

ジークも

「面白そうだな行くか」「

「本当に行くのか？」「

レイの父が言つた。 「お願いします。娘を助けてください」 レイは

「ありがとう一人とも私も戦うわ」

「えつ！」

父は言った。

「大丈夫だよ私も呪文は使えるわそれにこの人達と冒険してみたいの」

勇騎は

「よし！行こうぜーそいつを倒しにー。」

「おおー！」

三人は叫んだ。

「ここから南に進んで行くと洞窟があるそこに奴がいる気をつけてくれよ」

「おう！ぜつてえ倒してやるー行くぜー行くぜー行くぜー。」

三人は村を跡にした…

第2話脱出をしてもお金... (後書き)

次回はついに神様? と決戦!

第3話 神? VS 勇者達（前書き）

バオウ… テストとかで更新が遅れてしまいました。すみません。
勇騎… てめえをつたつと俺のかつこいい戦いぶりを書きやがれ！
バオウ… つむせー
出てくるな～

第3話 神? VS 勇者達

「ここか

三人は洞窟の前にたどり着いた。

「この奥にやつがいるのかぶつ飛ばしてやる!」

勇騎は言つた。

三人は洞窟に入った。洞窟の中には回りの壁に火が灯っていた。道は一直線に進んでいた。

何分歩いたか大広間に出了。

すると、前方に龍のような怪物がいた。両手、両足の爪が鋭く光つた。羽があり、色は緑の魔物だつた。

「ふん、我が神じや、神のベンゲルじや!」

ベンゲルと名のる魔物が言つた。

「ほう、生け贋を三人も出してきたか。」

すると勇騎は言つた。

「へつ! 生け贋になんのはてめえだ!」

ベンゲルは

「ふつふつふこの神である私と戦うと言つのか?」

ジークは

「なぜ、生け贋が必要なんだ?」と聞いた。

ベンゲルは

「死ぬ前に教えてやろうか。若者のエネルギーは非常に良いものだ。その若者のエネルギーを吸収して強くなるのだ。全てはジユラさまのために!」

「なに! ジユラだと? そういうことか、てめえ将軍だな!」

勇騎は言つた。

「ふん、今頃気づいたかそろそろ死ね!」

ベンゲルは言つた。

「来るぞ! レイ、勇騎氣を付ける!」

ジークは言った。

ベンゲルは口から火を吐いた。

しかし、三人共避けた。

「行くぞ！」

「炎の拳！」

勇騎は放った。

「ウインド！」

ジークは風の呪文を放った。

「ハイドロン！」

レイが叫んだと同時に水がすごい勢いでベンゲルに向かっていった。

「ふん！こしゃくな！」

ベンゲルは翼を羽ばたかせ、

「ウイルド！」

呪文を唱えた。

翼からものすごい風が吹いてきた。

「何！」勇騎は吹き飛ばされジークとレイの呪文も風に飛ばされてしまった。

「くつくつくーーこの呪文はズイー級のウインドの次に強いド級の呪文だ」

ベンゲルが言った。

「何！ド級だと！」

ジークとレイが言った。

「なんだそれ？」

勇騎は言った。

「いいか、呪文は力の級で別れているんだ下からズイー、ド、S、ゼロ級になっているんだ、つまり、俺とレイが使ったのは、ズイー級、やつが使ったのがド級だ。」

ジークは言った。

「へえー」勇騎は言った。

「おもしれー！全力で倒してやるぜ。」

ベンゲルは

「おもしろい。これならどうだ？」

ベンゲルは口から甘い息を吐いた。

「何！」

ジークはくらつた。そして、そのまま倒れた。

「ジーク！」

勇騎は叫んだ。

「大丈夫よ寝てるだけ！」

レイが言つた。

「ふつふつふ、そのまま寝ているがいい」

ベンゲルが言つた。

「てめえ～！」

勇騎は両手に炎をまとい向かつていつた。

「炎のガトリング！」

ベンゲルに向かつて炎のパンチを何発も繰り出した。
しかし、ベンゲルは

「スクタッグ！」

呪文を唱えた。

「何、びくともしねえ」

勇騎は言つた。

何発もくらわした。ベンゲルは全く効いていない。

「この呪文は防御力を上げる呪文だ」

ベンゲルは言つた。

「ウイルド！」

ベンゲルは呪文を唱えた。

風が勇騎を襲つた。

「うわ～」勇騎は吹つ飛ばされ。壁に思いつきりぶつかつた。

「勇騎！」

レイは言つて駆け寄つた。

「勇騎！ こうなつたら同時攻撃よ！」

レイは言った。

「合体攻撃？」

勇騎は言った。

「私がド級の呪文を放つから、その炎の呪文をあなたの炎を会わせる。そうすれば、やつを倒せるかもしない。」

レイは言った。

「よし！ わかった」

勇騎は構えた。

「でも気を付けて、かなりのMPを使うから一回しか打てないのだからチャンスは一回だけよ！」

レイは言った。

「わかった。いくぜ！」

勇騎は両手に炎をまとった。

「何をじちやじちや言つている？ とどめだ！」

ベンゲルはそう言って、

「ウイルド！」

と唱え風が勇騎たちに向かつて行つた。 「ブオルズガ！」

レイは呪文を唱えた。

すると中くらいの火の玉が出てきた。

「何！ 貴様もド級の呪文を打てるのか、いいだろ。勝負だ！」

ベンゲルは言うと、呪文の威力をあげてきた。

「勇騎！」

レイが言った。

「よつしゃ～炎のガトリング！」

勇騎は火の玉に向かつてパンチをたくさん打つた。

すると、火の玉が勇騎の炎と合体し、両手の炎がさらに激しく燃え、敵の風をそのまま打ち碎き、ベンゲルに向かつて行つた。

「何！」

ベンゲルに幾度の炎の拳を当てた。

「うお～！」

勇騎はベンゲルに拳を連続で当てる行つた。

そして、ベンゲルは吹っ飛ばされ。倒れたまま動かなくなつた。

「よつしゃ～」

二人は叫んだ。

「あ？ どうした？」 ジークが起き上がって言つた。

「よつ！ 起きたか、はつはつは、俺達の力で倒しちまつたぜ」

勇騎は言つた。

「ちくしょ～俺は最後まで寝てたのか。かつこわる」

ジークは言つた。

三人は村に戻つた。

「おお～戻つたか奇跡だ～」

村人たちは喜んだ。

「ありがとう。我が娘を助けてくれて、今夜は祭りだ～」

レイの父が言つた。そして夜、祭りが始まつた。たいこがなり、村人たちは踊つたり、酒を飲んだりしてゐた。

勇騎は村人たちに

「それでな、最後俺とレイがどめをさしたんだジークは最後まで寝てたんだぜ」

ジークは

「おい！ それ言うなよ～」

笑いがおこつた。

レイが来て、

「勇騎、ジーク、本当にありがとう」

と言つた。

勇騎は

「何言つてんだよ、お前の力がなかつたら、倒せなかつたぜ」

と言つた。

「そうだよ。あれは強かつたな、」 ジークは言つた。

「頼みがあるの私も旅に連れてつて！」 レイが言つた。

「え？」

勇騎とジークが言った。

「私、昔から旅に出たいと思ってたの、一人じゃ、不安だったから、行けなかつたけど、でもあなた達となら行ける気がするの。お願い！」

「」

「でも、俺達の戦いはきついぜ世界を救わなくちゃいけないんだ…」

ジークは言った。

「わかつてゐるあなた達が危険な旅をしてることくらい…でも私も世界を救いたいの」

レイは言った。

「いいんじゃねえの？」

勇騎は言った。

「結構強いし、こぞつて時は俺が守つてやるー」

勇騎は言った。

「ありがとう！」

レイは勇騎に抱きついた。

「…」

勇騎は顔を赤くした。

次の日、レイは父に「お願い！この人達と旅に行かして…」言った。

父は、言った。

「そうか、旅に出たいのか、前から言つてたもんな、それにこの人達となら大丈夫な気がする。わかつたいいだろ？」

「ありがとう！」

レイは言った。

「今だから本当の事を言つておく」

父は言った。

「本当の事？」

レイは言った。

「実は、お前の真の親ではないのだ」

父は言った。

「え？」

三人は叫んだ。

「お前が赤ちゃんの時の話だ、ある日畠を耕してたら急に畠の前に羽の生えた一人の女が現れた。この娘を育ててくれませんか?といわれ、うちには女房が死に、子供もいなかつたので、いいと言つて、受けとつたんだ。その子がレイ、お前だつたんだ」

レイは驚いた。

「そんなことがあつたのか。」

勇騎が言つた。

レイは

「でも、お父さんはお父さんに代わりはない。私のお父さんはあなただけよ」

言つた。

父は

「ありがとう! レイお前のような子を持って幸せだよ。無事に戻つてくれるんだぞ!」

「わかつてゐるわ。行つてきます!」

レイは言つた。

「よし! 行くか! でもどこへ行けばいいんだ?」

ジークは言つた。

「ここから南に行くと港町があるそこへ行けばいいだらつ」 レイの父が言つた。

「わかつた。サンキュー! じゃ行こうぜ!」

勇騎は言つた。

そして、三人は村をあとにした…

そして、ここは奴隸の城…

「ジユラ様! 逃げ出した勇騎たちにベンゲル様がやられました。」

がいこつの剣士が言った。

黒いローブを着た魔物、ジユラが言った。

「ふつふつふ、これで、五人いる將軍のうち、二人を倒したか。さあ、早く私の本へ来い！父のようにきれいさっぱり消してやるわ。あつはつは！」

ジユラの不気味な笑い声が響きわたった。

「あーくしょん！」勇騎がくしゃみをした。

「風か？」

ジークが聞いた。

「誰かが噂してんのかなこのかっこいい俺様の」

勇騎が言った。

「まさか～」

ジークが言った。

「よし！行こう！」レイが言った。

「おう！」

二人は言った。

俺達の戦いはこれからがクライマックスだぜ！

第3話 神? VS 勇者達（後書き）

バオウ…すみません勇騎が勝手なことを…
勇騎…次回は俺とレイのラブストーリー！
バオウ…だから出てくんない

お知らせ

お知らせ

かなり更新してないのですが

今仮面ライダーの小説かいて更新できないっぽいです

今じりになつてすみませんでした

あとは稼ぎです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2342e/>

龍・激・王！

2010年10月10日03時35分発行